

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【タイトル】

とおりゃんせっ！

## 【作者名】

白ノ瞑想

## 【あらすじ】

『あのう……その……殺していいですか？（笑）』『え!? なんです?!?』『いやあ、貴方のせいであちら側に帰れなくなっただんで』『いや、いきなり何!? 君だれよ!? てかあちら側って……』『あ、俺ですか? 俺は……』『俺は?』『とおりゃんせ』です』とある少年が興味半分で行った、とおりゃんせ。その帰り道をわざと違う道を通ったせいで消えるための条件が満たされず残されてしまったとおりゃんせ。とおりゃんせの怪談を終わらすには、とおりゃんせを行った本人を殺したらいいらしいが……『そんなのめんどあああっ!!』これは、少年が生き残りをかけて（謎）、また時には恋愛（謎）、そして、次々と襲いかかってくる妖怪たち（なんでやっ!）の超ウルトラダイナミックセパレートチーズフォンデュ……『いろいろつけたらいいって話じゃねえんだよっ!!』そんな青春妖怪バトルコメディー!!

【小説投稿サイト「小説家になろう」でも連載しています】

とおりゃんせっ！

僕は何か異常な気配を感じていた。

別に後ろに何かいるというわけでもないが、まるで肩に何か乗っかっているんじゃないかと思うほどの気配を感じていた。

早くこの場を立ち去りたい。出来るものなら逃げ出したい。

だが、そんな弱い心を僕の決心が押さえつけた。

『とおりゃんせを実証するんだ』という決心によって……

\*\*\*

「とおりゃんせっ」

「そこそつ、最近噂のあの話だよー」

授業がエンディングロールのように思えるチャイムとともに終演を迎え、いざ、帰ろうかとしていたところに憎たらしい腐れ縁の友人(以下トム)から声をかけられた。

会話の内容は耳のタコができそうなくらい聞かされた怪談話。どうにも、最近この近くの裏山でとおりゃんせと思われる不思議な怪事件が起こっているらしい。とまあ、こんな感じにトムはウザイほど一生懸命しゃべってくれているのだが……一つ分からないことがある。

「とおりゃんせってなんだよ……」

「おいおい。それを知らないのかマブダチイイツ!!」

一瞬、顔面が凹むくらいこいつの顔殴りたくなった。なんでこいつはこんなにもうるさくシャウトするのだろう。

まるで二分おきに一発芸をかます、某リアクション芸人のようだ。

そんな人を見たら勿論のこと「何、あの子たち。持病でも持ってるの?」とこそそしゃべっているような感じでクラスメイトたちが離れていく。違うんだ。俺は持病なんか持ってない。こいつ(トム)が現代医学じゃ直せそうにない発狂症をもっているだけなんだ……

そんな言葉はクラスメイトたちに届くはずもなく、教室の中はトムと俺の二人になってしまった。

「でさあ、とおりゃんせっていうのは振り向いたらアウトの話でさあ……………」

「ああ、ああ、もう分かった。分かったから帰らせてくれ」

周りの状態を全く見ていないトムがひたすらに熱弁を振るうことに耐えられなくなった俺は話を終わらすために少し大きな声で「聞きたくない」という姿勢を見せた。

実際、このまましつこい話を聞いていたら耳にタコが大量生産されるのである。そんな姿勢にさすがにアホのトムも気づいたのか、「あ、そうか。うん」と静かに熱弁を振るうことを止めた。

そうなった状況を確認した俺は静かに席を立ち、トムに「じゃあな」と冷たい別れを告げて教室を出た。

校庭に出てみると、辺りはもう夕焼けの日の光で赤く染め上がっていた。

今日はいつも楽しそうに活動している運動系部活の方々もいなくなっていて、辺りは静かな虫の声だけが響いている。

そんな校庭を横断しながら、僕は今日の一日を振り返っていた……

\* 朝、登校時 \*

まず、トムに強烈な朝のハグをされ、恨みと嫉妬の心のボールに身を包んだクラスメイト達に半殺しにされる。

\* 昼、昼食時 \*

根も葉もない「僕とトムがつきあっている」という噂話が教室中に広まっており、それをどこからか聞き付けた朝の方々の暖かくて痛い洗礼を受ける。

\* 夕方 \*

先程の妖怪マニアことトムの熱弁により、周りの方々が冷たい目を

向けながら逃げていった。

………つろくなことであってねえな僕。

朝は洗礼、昼も洗礼、そして、夕方は軽蔑の目。ありえない。普通の男子高校生にはありえない一日だ。

これもそれもあれもこれもどれも奴も（謎）あのトムのせいだ……あいつのせいで僕がこんなグロッキーな目にあっているんだ。

人間、一度恨みの焰を点火すると一気に燃え上がるらしい。現に僕の心の状況は完全に恨みの焰で燃え上がっていた。

そう、歯ぎしりをしながら恨みの呪詛を唱えていると、ある事柄が頭をよぎった。

『でさあ、そのとおりやんせっていうのは、裏山に小さな神社があるでしょ？ あそこ、今誰もいないんだけど、あそこにちゃんと石段上って行って、神社のお賽銭箱に10円放り込んでから帰る。それがとりやんせ。ただ、これにはルールがあつてね。帰りには絶対後ろを向いちゃダメだよ。話しかけられても、変な歌が聞こえてもダメ。ちゃんと家に帰るまで後ろを向いちゃダメなんだ。帰ったらひとつ神社のある方を向いて願い事をいう。そしたら、その願いが叶うんだってさ……』

………待てよ。これ、嘘っぽいけどもしかしたら……あいつとオサラバできちゃう？

所詮後ろを振り向かずに帰るだけだろ？ 余裕じゃねえか……例え、これがただの空想話だったとしても失うのは十円程度……ふふ……

やってみる価値はある!!

僕は回れ右をして、裏山のほうへと駆け出した。

そんななか、後ろのほうで不思議な鈴の音のようなものがした……

## とおりゃんせっ！(続2)

裏山にたどり着いた僕は全身が小刻みに震えるくらいビビっていた。

どのくらいかというところ、「俺、バンジーできるんだぜ」といつているやつが、いざバンジーをすることになると「俺……ちょっと下痢ぎみなんだぜ」って真顔でいうくらいビビっていた。結局その後、思いきり突き落とされて下のほうに下ろされると豪快に失禁していたくらいビビっていたのだ。

はつきりいつて初めてくる。……には。

辺りはもう夕日が沈みかけて暗闇が刻一刻と迫ってきている。森の中からは動物なんだろうが、暗闇に陰ってしまって目だけが金色に光ってこちらを見据えていた。きつと昼間には和んでしまうほど可愛い小動物なんだろうが、今は終焉の闇へ誘う悪魔の眼差しにしか見えない。てか怖えよ。

神社への唯一の道の石段も森の木々の影のせいであらうじて見える程度だ。

こなきや良かったよ……」じじ。

基本ヘタレである俺は足が小刻みに震えている。生まれたての子羊のように……隣の家のもう90歳のじいさんのように。

後悔が大きかった。なんでここに来たのかと、なんでこんなホラースポットに来たのかと……

そして、いい加減に進めよと催促する自分がいた。「はよ、すす……」わかってるようるさいなっ！

勇気を持って最初の第一歩を踏み出す……

石段にしっかりと第一歩を踏み出し、しっかりと落ち葉を踏みしめた。



……  
僕はそのまま、石段のほうからそれ、森のなかに転がっていった

## とおりゃんせっ！ (続3)

……僕はそうとう転がったらしい。  
半端なく転がったせいでどこどころで思いっきり頭を売ったり  
していたが。

やっとのことで平地についたのか、体の回転が止まり、ふらふらする  
足取りで立ち上がる。

辺りを見回すと、ここは我が家の裏の塀の前だった。

……こんなところに繋がっていたとは……

自分ながらも驚くことであった。

なぜなら、あの神社とは学校を挟んで間反対の方向に位置している  
ためである。故に、なぜここにでてこれたのが不明だ。ホントに不  
明だ。

なぜ、我が家の雑木林に？

まあ、これは深く考えないでおこう。

きつとあれだよ。途中で僕は気を失って、倒れているところを親切  
なジェントルメンがここまで運んでくれたんだ。うんうん。そうだ  
ろう……

……それはそれで怖いかな……

なんで我が家を知ってるんだよ。てか、なんで雑木林に？ 家に送  
るという考えは？

だめだ、このまま考えていては僕の限られたキャパシティが崩壊し  
てしまう。

そうだよ。ここは冷静になって家に帰るとしよう。

そして、寝て目が覚めたら全部夢なんだ。夢だったって落ちだろ  
バーミー!!

無理に自分の心を落ち着け、玄関の扉の取っ手に手をかけた。

独り暮らしのためか、内側から冷たい風が流れ出て、静かに我が家



への帰宅を告げる。

よし……もう寝よう。寝て、何もかも忘れよう……  
そう思い、靴を脱いで玄関に上がるうとすると……

『あろう……』

ふいに、後ろから少女のような声が聞こえ、振りかえる。  
その時、後ろの光景を見て、僕の恐怖の感情は爆発した。

『あの……その……殺していいですか？』

黒いはずの瞳孔は綺麗な琥珀色。右手は手のひらが有るべき場所には大きな鍵爪。口元からは人間とは思えない、蛇のような舌をのぞかせている。

『一人』の化け物がそこにいた。

\*\*\*

『あの……殺していいですか？』

「お、お断りします」

『あの……殺していいですか？』

「ええと、お断りします」

『ぶつ殺していいですか？ アーユーOK？』

「えと、NOで……」

『じゃあ、首を千切るだけ……』

「あう……勘弁してください」

僕は化け物の少女と生死をかけたクエスチョン&アンサーを繰り返していた。

自分がアンサーを繰り返す度に少しずつ、彼女の表情が険しくなっていることに恐怖を覚える。

結局僕はあの後、少女に『今ここで殺されるか、もう少し後か』というありえない質問をされ、それに『後で……』と答えたらこの状態である。

少女は腹が減っているのか、惣菜パンを勝手にあさり、行儀悪いか通り越して、袋ごと食べている。

そして、プラスチックが擦れる嫌な音が途切れる度にこの選択が一つしかない押し問答。僕の残りメンタルライフポイントはあまりなかった。

……このままでは……殺られる……

わ、話題を変えなくては……

「あの、すみません。ずっと気になっていたんですが……あなたは誰ですか？」

僕がそうひきつった表情で質問すると、少女はにっこり笑って返答してくれた。

『俺は……』「とぉらちゃんせ」です

## とおりゃんせっ！(続4)

「と、とおりゃんせ……だど……」

化け物の少女が言った言葉に、不意に思いだしたトムの言葉が重なった。

『とおりゃんせをしている時は、決して後ろを振り向かないこと。後ろから誰かに呼ばれたとしても、家に帰るまでは……』

僕が後ろを振り向いた時はいつだっただろうか……

確か、玄関で靴を脱ごうとしていた時。あれ、それって帰宅してるんじゃ……

でも、もしそれが家の中に完全に入ることを意味していたら……どうなるんだ……

中途はんぱだったら……俺はどうなるんだ？　もしかして……殺られる？

『あのう……聞こえてますか？……無視してたら殺りますよ？』

「いえ、全然無視などしておりません。ちつとも。一欠片も。一切」

少女はいらいらしているのか、鍵爪をこちらの顎に押し当ててくる。

このままだと僕はあつという間に殺られてしまいそうなので顔を一瞬で仮初めの笑顔に包ませ、わざとらしい返事をした。

もしかして、後ろを向いたら……ってやつがこれなのか？

デスまで一直線の新幹線に乗ってしまうことなのか？

見たところ、少女の鍵爪は相変わらず僕の首筋を狙っている。(少女のほうは、今度は学習したのか袋を開けて惣菜パンを貪っているが……)

しばらく、惣菜パンを貪っている少女の様子を観察していると……

『……たく。てめえのせいであちら側に帰れないじゃないですか

……』

そう、小さく少女が呟いた。

その意味のよくわからない単語に思わず「あちら側？」と口を滑らせてしまう。それが聞こえたのか「キッ！」という効果音が出そうな目で睨むと、少女は怒れる獅子かのごとく叫び散らした。

『そつですよ！ てめえがちやんとおりゃんせを行わないから、てめえを殺さないと帰れなくなっちゃったんですよ!!』

「え？ ええ？ あちら側って……」

『俺達妖怪は大抵、人間達がある一定の条件を満たさないとこちらの世界に出てこれないし、帰れないんです！ そこをあんたは「ちゃん」と来た道を帰る』という条件を無視しやがったから「目標を殺す」という帰還条件しなくなっちゃったんですよ!!』

「え？ い、いやそれはそつちが後ろから急に引つ張るから……」

『いいわけ無用!! 大人しく責任とって殺されなさいやああああ』

少女は昔の「キーツ!!」と叫んでとびかかる戦隊モノのザコキャラのような跳躍でおそいかかってきた。

そ、そんな……僕の人生がこんなところで終わるだなんて……

そう、覚悟を決めた。さよなら……僕の高校生活……君の高校生活はオカルトなモノによって幕を引くことになるよ……

そう、最後のあまりにも嫌な遺言を心で呟いた時……

『ぐ、ぐちゅるるぐちゅるん……』

「へ？……」

変な音がなり響いた。

一瞬状況が読めなくなる。

なんだ？ 今、何が起ったんだ？ 僕のお腹がなったのか？ いや、まさかこんな緊迫した状況に……

ふと、少女のほうを見るとお腹を押さえて悶絶している。

あ、あれ……もしかしてさあ……

「だ、大丈夫ですか？」

『お、お腹痛い……』

あ。さっきの惣菜パンの袋だね。

こうして、僕の命は惣菜パンの袋によって救われたようだった

……

## 焰の天然記念物

のどかな朝の気配が僕を睡眠から目覚めさせた。

静かな朝の風景。親父やお袋は別居。兄貴も別居。一人の静かな朝の時間だ。

おもむろに時計を取りだし、今の時間を確認した。

そこにはいつもより少し早く『5:30』と記載されている。

今日はいつもより早く、すっきりとした目覚めが出来たようだ。

僕は大きく深呼吸し、気持ちのいい朝をしっかりと噛み締める。

そして、いい気分でベッドから降り、軽い足取りで扉を開けると

……

『おはようございます。最後の朝はいい気分ですか？』

包丁を持った昨日の少女がいた。

\*\*\*

なんとか切り抜けた。

朝から一風変わったスプラランターに追いかけられるとは思っていなかったよ。包丁を持って髪をふりみだしながら明らかに『あんた大丈夫じゃないよね？』という目で追いかけてくる。

実際、『これは夢だ』と30回ほど頭の中で念じまったほどである。というか心臓に悪い。恐らくこれで僕の心臓年齢は20さい年をとることになっただろう……勘弁してください。

ちなみにどう切り抜けたのか？

簡単な話、その時僕はかなり気が動転していてあんまり覚えていないが……たまたま近くにあったバットでひたすら少女を殴った記憶がある。

……

……人間、命の危険が迫るとなんかのリミッターが外れるらしい

そんな感じで気がつく少女が僕の目の前で土下座して許しを

乞っていた……

何やってたんだろっ……僕。

『ああ、絶対いつか殺してやりますっ ……たんごぶの数だけ風穴あけてやりますっ ……』

少女のほうは昨日の二割増し程度に殺意が増加していた。もしかして……自分で命縮めてしまったのだろうか？

このままでは登校してる最中に後ろからグサッとやられそうなのでとりあえず何かで機嫌を取っておかないと……

「あの……なんか食っっ」

次の瞬間後悔していた。

なんで自分は少女に対して『何か食っ？』と言ってしまったのだろっ……

普通、女の子が相手なら何か可愛いものとかそういうもので機嫌を取るだろう……なのに……なんで食べもの……

そう一人で後悔していると、少女から意外な返事が帰ってきた。

『ああ、じゃあ昨日食べた「パン」だっけ？ それを食べたいです』

「え？ そんなんでいいの？」

『別にいいですよ。少なくとも、あれは人肉よりは全然美味しかったので』

コメントに背筋が凍るような一言もあったが、これでなんとか機嫌がよくなりそうだ。

とりあえず、惣菜パン各種を用意することにしよう。まずはそれからだ……

## 焰の天然記念物（続2）

現在、僕は学校へ登校している真っ最中である。

晴れやかな天気。辺りを飛び回るかわいい小鳥たち。平凡な日常。

今、その全てが当たり前にあることにやばいくらい感謝している自分がいる。

さて……少し、さっきの状況をふり返ってみよう……

\*\*\*

『ああああああ、やっぱり旨いですねこのパンというやつは！』

惣菜パン各種を用意し終わったと同時にかなりの勢いでいっきに消化していく少女。

約15人前用意されたその惣菜パン達はどんどんブラックホールに吸い込まれるかのように少女の胃袋の中へ姿を消していつている。そんなハイスピードであごを動かし一気に食いまくっていく少女の囁きは正直いうと、かわいいとかそついう感想ではなく、『凄い食べるなあ（唾然）』としかならないのである。

少女の食欲は底がないのか、もう気づけばラスト1。残り一個というものになっていた。

「あ、ああ。お腹減ってるのかな？」

『お腹減ってるのなんのって、昨日食べたものをほとんどリリースしちゃいましたからね。もうお腹すっからかんで餓死しそうでしたよ』

少女はそんなオーバーな一言をいうと最後の惣菜パン（ラスト1）を口の中に放り込んだ。

女の子に必ずあるといわれる恥じらいはこの少女には一欠片もないようだ。食事を終えた少女は爪楊枝で歯にはさがったものをとっていた。（完全にオヤジだ）

そんな状況に若干引きつつも不意に時計を見ると……



……けっけっ時間がやばくなっていた。

「あああああああああああああっ!!」

『わっ!! ちよっど何!!?』

「やばい。学校が!! ちよっど行ってくる」

『え!?! どっど……』

「いってきまあああああすっ!!」

そうして、僕はとおりゃんせを置いて、家を出たのでした。

\*\*\*

以上、回想終わり。

回想をしていた間にもう教室についたようだ。

便利だな……回想……

そう思いながら、いつも座っている座り慣れた机に座る。(表現がおかしい)

今日はめずらしくいつも通りの朝の風景にならなかった。いつも殺意を帯びている方々も今日は静かになっている。いつも遅れて来たからか……

そう思ったが、そうではないようだった。

いつもうるさくて仕方ないトムの机には誰も座っていなかった……

教室の中はいつもに比べて静かな空気が流れていた。

教室の端にある一つの小さな机。そこにいつもいるはずの煩いやつがいないだけでどうも違うのだろうか?

周りの生徒達が朝のHR前の休憩時間を雑談の花で埋めているのに、僕の周りだけなぜか静かになっているように感じた。

「おい。そろそろHRだぞお前ら。席につけ」

一人、何かよく分からない感情に浸っていると、いつの間にか担任の総人先生が無駄に大きい出席簿を持って教壇に立っていた。

(あれ? なんであいつが休んだくらいで僕はこんな気持ちになってるんだろう?)

ふいにそう思い返してしまつ。

昨日もあいつと二度と会わないようになるためにあんな危険な遊びをしかしてしまつたほどののに……(そして、もれなくあの殺人鬼が来てしまったのに)

そんな切ない感情が胸をなんども締め付けていた……

「おい。崇野。返事をする口をお前は持っていないのか?」

「あ、はい。先生」

「そうか……持っていないのか。崇野……廊下に立ってる……」

「え……」

先生のその一言が発せられると同時に弾けたようにクラスメイト達が笑い声をあげる。

その笑い声に凄く不快に感じるが僕の心境のほとんどはあいつがないことへの不安定な感情で埋めつくされていた。

渋々、バケツを持って春風の吹き込む廊下へと足を運ぶ。

そう外へ移動している間でも出席は続けてとられ続ける。

そんな中、違和感を感じる現象が起こった。

「ああ、照政の次は……新島だな……」

……っ!?

『通来銘夢(トム)』の名前が飛ばされたのだ。

「先生っ!!」

僕は思わず扉を激しくこじ開け、叫んでいた。

「なんだ? 崇野。持病か?」

「先生っ! 通来さんの出席はとらないんですか!」

聞き間違いかもしれない。あるいはあえて休んでいるから呼ばなかったのかもしれない。ただ、そうだと信じていたい。

だが、現実はそのとはいかなかった……

「何を言ってるんだ、崇野。通来なんてやつは俺のクラスにはいないぞっ。」

「そんな、先生。ほら、あそこの机に……」

そう指差した先には、ただ、空いたスペースがあるだけだった……

(そ、そんな……)

崩れ落ちる僕を心配そうに先生とクラスメイト達が見つめてくる。

「おい……崇野……お前疲れてるんだろ？ とりあえず保健室行って」

「いえ、先生僕は……」

「無理するな。ほら、保健室の紙書いてやるから……」

そういって先生は少し不安そうな顔で書類をかきはじめた。

そんな中、僕は何か凄く嫌な予感を感じていた……

## 焰の天然記念物（続3）

現在地。『保健室』。

結局、保健室の送還されてしまった。病状は『頭に現代医学で解明できなかったらしい的な脳腫瘍』と書かれている。

要約すると『頭がそろそろやばい危険なやつ』である。なんとという教師だ。生徒を危険生徒扱いかよ……

とか悲しみにふけっている自分がここにいた。

現在は保健室の先生に『頭大丈夫？』ととても失礼な心配をされた挙げて保健室の固定ベッドに寝かされていた。

『窓の外でも眺めてなさい』と優しい保健室の先生は金具で僕をベッドに固定してから保健室を出ていったのがついさっきのお話。

ホントに優しいな……くそ……

そんな感じで僕は拘束された状態で外の景色を眺めていた……

チチチチツチチチ……

晴れわたる青空。

その中を楽しそうに飛ぶ小鳥達。

その華麗な景色はさっきまでの最悪の展開を少しだけだが忘れさせてくれるようだ……

軽やかに宙をまいながら落ちる木の葉。

軽やかにバクテンを決めながらこちらに迫ってくる茶髪の少女。

そして、軽やかに『お前を今こそぶつ殺してやるですう!!』と叫びながら、保健室の裏口の扉を開け放つ少女。

……あれ？　なんかデシヤブ。

「いつまでも帰ってこないと思ったたらこれはまあ……なんというチャンス！　これだと思う存分にぶち殺せますねえ……クッククックク……」

鬼がそこにいた。

だが、不思議とその外見は鍵爪などがなくいたって普通の少女の姿になっていた。

「あの……なんか姿変わってませんか？」

僕のその言葉を聞いて不思議そうに首をかしげた後、自分の姿を確認し始めた。

そして……

「うじゃああああああああああっ!!!」

一見聞いた感じだと、とても可愛らしい悲鳴が校舎中を響き回る。

その時、校長がびっくりして録画していた昼ドラを消去してしまったことはまた別のお話。

「なんたること!? なんたる失態!? なんてことなのバーミーイイイツ!!」

叫ぶにつれてどんどんカオスになっていくとおりゃんせの叫び。

なんとということでしょう? 進むにつれて最後に至っては明らかに外国の言葉と化している。

「なんでこんなひ弱な姿に!? このままじゃこのクソ野郎を首しめて殺すことしか出来ないじゃないですか!？」

「まだ僕を殺す気!? いい加減そんな殺意を捨ててくれないでしょうか……」

「お断りです。俺はあんたを殺すまであちらに帰れません。というより昨日より事態が悪化しているのでなおさらあんたをぶち殺すです」

そう、笑いかけてきた少女の顔には殺意がみち溢れている。

僕の本能がしっかりと告げている。このままじゃやばいと……

『ふおおおおおおおおおっ!!』

拘束機を全力でぶち壊す僕。(リミッター解除)

「なっ!?!……」

「僕は僕の命を守るために貴様を殺す」

人間、リミッターが外れると人格が変わるらしい……

「な……あなたからこんなにも恐ろしい性格を所持していたなんて……さすが、俺を帰らせないようにしたクズ野郎ですっ!」

そうして、何かよく分からない戦いが今始まるうとしていた……

## 焰の天然記念物（続4）

なんだろう……このカオスな状況……

「おのれ……やっぱりあなたはゴミクスで公害のような人間のようですね……武器にメスとは卑怯ですよ!!」

僕は刃渡り3cmほどのメスを握りしめてとおりゃんせと対峙していた。そして、相手のとおりゃんせはというと、何でそれを選んだのかよく分からなかったが……

「俺なんて、よくわからない人体模型（ミニチュア）ですよ!!」

「貴様はなぜそれを選んだんだっ!! まだ、もう少しましなものがあつただろうに!!」

「あなたをより身近なもので慘く殺そうと考えてたら、握りしめてました」

「いや、なんで!! なんでそんなミニチュア人体模型を手に入れることに至るわけ!? しかも身近なものじゃねえし!? それがここにあること僕初めて知ったよ!!」

「何をいってるんですか!! あなたの体の中にはこのような臓器がしっかりと詰まってるでしょ!!」

「あ、うん……そうだとしてもそれは身近なものじゃねえよ……」

何か自分が凶器を持っていることが申し訳なくなってくる。しかも、このとおりゃんせのやつは目を潤ませながら足がくがくさせて対峙してきている始末。ここに偶然誰かが来たとして、捕まるのは無論僕のほうだろう。

「ああ……もう分かったよ。武器を捨てます……」

そういつて僕は唯一の命の防衛ラインであるメスをとおりゃんせ側に放った。

さすがに武器を捨てた相手を殺るほどこいつは腐ってないだろうと信じて……

「馬鹿め……死を急いだなおろかな人間めえええええ!!」

……信じてたのに(涙)……

とおりゃんせは僕の小さな信頼をふみにじり、さきほど放ったメスを掴んで僕の喉元へと降り下ろした。

もう、人を信じるのはやめよう……

そう思ってしまった時。

「ぶっぶっぶっ」

とおりゃんせは急に顔面を押さえて地面に倒れこんだ。

何かさつき赤い何かが飛んできたような……

そう、思い生まれた疑問の種は二秒で腐ることになる。

「おい!? 大丈夫か!! マブダチ!!」

「え……………トム??」

何かが飛んできた方向から姿を現したのは、全身が若干燃えてる憎らしいトムだった……

【第二話が終わったので】

皆様、第二話がおわりました。

ここまでで数々のカオスな状況があり、ついでこれないレベルになっっていると思います。

はい、わかってますよ。僕のやらかしです。

ここまでで様々なキャラやシチュエーションがあり、それ全てが早速で進めてしまっただけいあこつとも十分承知です。

ここまでの作品を読んでくださった方々、ありがとうございます。

引き続きよんでくれると嬉しいです。



## 兄と蛇の混沌喜劇

「おい〜」飯早く作ってくれよですっ〜」

「マブダチ！ あたしは出来たら肉類が多いといいな」

……………。

びっ。

びっびっ。

ズギューンズギヤギヤギヤ。

チュドーン…………

「ああ、また殺しやがったですね……………」

「そっちが弱いだけだよ、とおりゃんせの怪談くん」

「うぬぬ…………… 人間から妖怪に変化したばかりのくせに生意気で  
すっ……………」

「なあ…………… お前らは『手伝っ』という気はしないのか？」

流石に人のうちに泊まり込んできているなかでまるで当然かのよ  
うにゲーム機をびこびこいわせているトムとおりゃんせにキレぎ  
みで声をかける。

「何いってんですか？ 俺があんたを殺さないところで充分感謝する  
べきですよっ。」

「残念ながらその脅しはもう効かないぞ？ ただの人間になり下がっ  
たお前にはこの割り箸でも充分勝てるぞ？」

「うっ…………… 人間風情が生意気ですっ…………… 絶対寝込みとか襲って殺して  
やります……………」

「そっか…………… わざわざ自分で予告してくれるとは……………」

「は!? し、しまった!？」

「僕の部屋には誰も入れないように鍵かけとっつ……」

「っつ……自分のバカっ!!」

顔を手で覆って人に見せないように悔し涙をこぼすとおりゃんせ。

もはやその姿は昨日の化け物のような形相ではなく、普通の茶髪の少女がいじけているようでかわいく感じてしまう。……いや、決して僕がロリコンというわけではない。そうだよ。ただ、女の子がこういうすかを見せてくれると、やはり自分も男の子。頬の筋肉がひとりですらに緩んでしまうのである。

「……マブダチ……顔キモいぞっ」

「いっつんじゃないっ!! そうと自分でも思ってるみちくしょっ!!」

トムが悪気はないのだろうか、ぐっさりと心に刺さる一言は僕の大切なトコロテンのようなハートに亀裂をいれた。

「あ、ごめん。気にしてたんだね。てっきり気にしてないのかと……」

「ごめん。こいつ悪気はないとしても許せねえ。

「ああああもつそのことについては言っつな。これ以上言われたら裏山に逃走してしまいそうだから。……とっろで……お前にまだ聞いてないことがあるんだが……」

「ん……何かあったっけ?」

トムは『そんな大事な話なんかあったっけなあ……』とでも言いそうなの顔をしてゲーム機を手に取った。

「……おい。それを置け」

「……あれ? 『気づかれた?』」

「いや、気づくだろ。てか真面目な話してんだからそれを置け」

「ええ、手からなんか離れないよっつ」

僕は無表情になって静かに玄関のほうへと出ていく。そして、一本の釘バットを手に取り静かにリビングのほうに戻ってきた。……で、

ぐっじゃあ。

何も言わず、トムの後頭部を思いっきり釘バットで殴りつける。

「んぎゃあああああああつ!! 削れた。若干後頭部の肉が削れたあああつ!!」

けっして、皆様の食卓風景ではお店出来ない状態でリビングの床を転がり回るトム。そんななか、僕は更に追い討ちをかけるように転がってきた方へ垂直にバットをふった。

辺りに赤い液体が飛び散る。

それでも、もう一発。

そして、もう一発。

これでもかともう一発。

最後に締めの一発。

もはや、曲がってはいけない方向に体が曲がり、赤い液体まみれになって『も、もう……ふざけまへふ……』と必死に懇願を始める事態。少しやりすぎたな……と小さく反省。(ヒロイン撲殺ってなかなかないよね?)

「……あんだ凄い鬼ですね……」

「お前も調子に乗ってるとこつなるぞ?」

「……父さん……」ここに外道がいるよ……」

かなりひいた表情で後ずさりをするとおりゃんせ。その表情の中に少しだけの僕への恐怖心もかいま見えた。

まあこんな話は置いといて、今はふざけられては困る。

僕は再び先程フルボッコにしたトムのほうに視線を向けた。

「お前……なんでそんな姿になってんの? そして、何でお前がいないことになってんの?」

「いや、そんなにいつぺんに聞かないでマブダチ」

「じゃあ、なんでお前そんな姿になってんの?」

「……いやあ、自分でもよく分かんないけど……朝起きたらこうなってた」

いや、そんな簡単な話じゃないだろ? 思わず、突っ込んでしまいそうだったがそこをこらえて飲み込んだ。

そこは今問題では無いからだ。

今の問題はなぜ、トムがこんな姿になってしまっているのが重要

なのである。

「だから、なんでそんな姿になってんだよ」

「そんなのあたしに聞かれても困るぜマブダチ……」

トムは今までこらえてたのか僕も初めて見る泣き顔を見せた……

「朝起きたらなぜか神社の前だし……お父さんお母さんも私のこと忘れてるし……なんか体が燃えてるし……そのくせなぜか周りには燃えないし……」

床に「の」の字を書きながら本格的にいじけるトム。ちょっとやりすぎてしまったかもしれない……

「ああ、泣くなよトム。お前のせいじゃ無いんだからな」

「そうだぞ。銘夢。それはこの暴力人間のせいだからな……」

「……………へ？」

思わず、とおりゃんせの漏らした言葉の応対にそんな声がでる。

え？ なんなの？ 僕のせいなの？

「お前がそうだったのはこいつが『とおりゃんせ』をしたせいだからなあ……………」

そう、とおりゃんせは僕のほうをみて不気味に笑いながらいつてきた……………

## 兄と蛇の混沌活劇（続2）

「僕のせいだと……」

不意にとおりゃんせを行った昨日のことを思い出す。

たしか、とおりゃんせって成功すれば『願いが叶う』ものだった……  
そこでの僕の願いは……

「銘夢さんと一生関わらなくていいようになること……でしたよね？  
願い事」

とおりゃんせが僕の心で浮かび上がった言葉をそのまま告げた。

その言葉が聴覚神経に伝達された時、全身の血の気がひいてしまっ  
ていることが分かった。僕の心の中で後悔とぶつけようのないよく  
分からない感情が渦巻いている。

「え……土郎？ それって……ホントなの？……」

驚きと悲しみを同時に表現したかのような複雑な表情でトムが僕  
に訪ねてくる。

否定なんか出来ない…… 実際あの時には連日続く不幸の種のトム  
がうざったくて仕方がなかった。弁解の余地なんてない。ただ、純粹  
にトムの存在をうっとうしく感じていた自分があの時いたのだから。  
ここで言えることは一つだった。

「ああ、そうだよ……トムと合わなくていいように願ったんだ……」

「そう……」

トムが顔を隠し、体を小刻みに震わしていた。

それを見ている僕の心は後悔はほとんど消え失せ、あるときへの自  
分への怒りに満ち溢れていた。

軽はずみな行動をとってしまった自分への怒りで僕の体温はいつ  
も以上に上昇していた。

「ありがとう……正直に話してくれて……」

「いや……あの……」

言葉が上手く紡げない。許してくれるという意味なのだろうが、今  
の僕にとってはそれが最も辛いものだった。

トムは顔をあげ静かにいった。

「士郎くんはツンデレなんだね」

「……………」  
「……………今この人はなんといったらろう？」

体の体温が一気に冷めていく。

それと同時に何か別のものに対する怒りが込み上げてきた。

「……………あれ？ そのバット何に使うの？」

「……………」  
「……………使うの」

メキヨリ。

まっすぐに降り下ろしたバットはトムの顔面を漫画のように凹ませ、とても不快な嫌な音を立てた。

顔面の様子は見るも無惨な状態になり、赤と若干どす黒い鮮血が部屋に飛び散る。

『「……」で事件が起こったのだ』と某推理漫画のような展開になりそうなほどの現状がわずか十秒で完成した。

「がはあああ!？」

トムは大きく体をのけぞらせながら「うぐめき、のたうちまわり……………」

(……………ピクピク……………)

そして、静かになった……………

「もう、あんた人間じゃないですよ？ 外道ですよ。人間のゴミ

ですよ?。」

とおりゃんせが若干頬をひきつらせながら告げる。

恐らく、今この瞬間を誰かが見れば『いやああああつ!! 人殺しいい!!』と叫んで逃げていってしまいそうだ。いや、確実に逃げて警察に猟奇殺人犯として僕のことを伝えるだろう。

だが、僕の心に迷いは無かった。

だってこいつ妖怪じゃないか！ 人権とかそんなのないしね。

「妖怪には人権ないって……………いよいよあんた外道ですね……………」

心の声が漏れてたらしい。

そうして、僕は被害者であるトムを還付なきまでに叩きのめし、再起不能にして『外道』という称号をえたのだった……